

どもることに関する体験談紹介 & 募集!

お陰様で、この小中高校生の吃音のつどいは次回で、第89回目となります。第1回目が、1998年5月なので、ちょうど24年間もの間、このつどいの場で、どもることに関しての語り、対話を、綿々と紡ぎ重ねてきたこととなります。これら**体験談**は、つどいの話し合いなどの場でも都度、紹介されるものですが、つどいの宝そのものとも言えます。吃音を如何に生きて行けばいいのか? 気付き・知恵・ユーモアにあふれています。挫折重ねつつも、心の傷の癒し、そして自らの精神的成長につながる物語だと言えるでしょう。

つどいは、どもる本人のまず、場であります。それにとどまらず、ご両親ご家族のつどいという場でもあります。今回、当事者のお母さんの体験談を紹介しますが、16年前に始まり、お父さんも重要なある役割を担われています。どもる当事者はもちろんです。そしてご両親の方々もお書きいただき、お寄せいただけますでしょうか。当事者我々の声こそ、長い現実生活での、真のエンパワメントになると言えましょう。

tochigi001@outlook.com

つどい代表 佐藤 隆治

「16年前のサマーキャンプ(当時小1)」

つどい参加者のお母さん

22歳になった息子は、家族に対して言いたいことを全て口に出す子に育ちました。とは、言いつつ母親の私も同じく100%、思ったことを口に出す人間なので、きっと私が息子をそう育てたのだと思います。

息子は吃音でからかわれたことはありますが、幼い頃から言い返すことができる子でした。中高生にもなれば、話し方を問う子もいたようです。

「自分は吃音がある。」

と相手に伝えるようでした。クラス替えのあった小6の時は自己紹介で

「僕は吃音があります。」

と言い、周りは

「知ってる。知ってる。」

と、担任の先生がビックリして(素晴らしい!)保護者の私に電話をくれました。吃音も決められたことばは吃りません。慣れてしまったのか、仲の良い友達はあまり気にならないように思えます。

吃音のつどいを知ったのは16年前のことです。息子が小1の時です。当時通っていた小学校に「ことばの教室」(通級)があり、そのことばの教室の

担任の児嶋和子先生からの紹介でした。

小学校に上がる前に、早く吃音をなおさなければいけないという焦りは母親の私にとってはかなりのプレッシャーでした。

どうやったらなおるのだろう、と図書館に行き、吃音はなおるという本ばかりを探し読みあさっては、その本に書いてあったことを試したり、吃音がなおるという所を見つけたら、そちらに伺い、話を聞きに行ったりもしました。どちらも

「ゆっくり話さない。」

「発声練習の仕方。」

息子に、「ゆっくり話そうよ、」と母親の私が息子にいくら言っても、当の本人は吃って最後まで言いたいことを早口で話す。

ある時に、関西に住む伊藤伸二先生(日本吃音臨床研究会)という方を見つけ電話をしてみました。私は伊藤先生に「息子はどうしたらなおすことができるのか、」を尋ねたと思います。返ってきた言葉は、「吃音は治らないよ」という一言でした。

何てことを言うのだろう、と当時は思いました。

仕事から帰宅した主人に、「伊藤先生から吃音はなおらないと言われたのだけど、どう思う?」

主人は、「頑張って努力してもどうにもならないこと、できないことはある。」と返ってきました。どうして、

皆こんなことを言うのだろうと思いました。

そんな私の焦りは消えないまま息子は小学校へ入学し、当時のことばの教室の児嶋先生に経緯を話しました。

「お母さん、結構いろいろやってるんじゃない、伊藤先生にまで電話したんだ、すごいじゃない、」と笑いながらおっしゃっていましたが、児嶋先生も言い方は違えども、「吃音が治ったと聞くのは小学校1年生までかな、それを越したら吃音と付き合っていくのかな、」ということが返ってきました。

溜め息でした。

でもまだ大丈夫かもと半分諦めきれない私がいきました。

息子の吃音の状況は何も変わらず、夏休みが入ろうとしていました。

児嶋先生から、「お母さん、吃音のつどいがあるのは前に話したよね、小学生から大学生までの吃音の子が集まるサマーキャンプがあるのだけれど都合が合えば行ってみるのも良いかもよ、」と、勧められました。

どんなものか、当時まだひとりっ子だった息子と主人と家族三人での参加を決めました。

サマーキャンプ前、主宰者の佐藤隆治さんから心配事が無いか、電話をいただきました。

「さ、さ、佐藤です。今年は小学1年生は、男の子三人参加予定です。」

その後の電話の話では、佐藤さんの吃音はあまり目立たなかった記憶があります。この時点で参加することに心配はしていなかったと思います。

サマーキャンプ当日、東京駅集合でした。主人と息子と私の三人で参加をさせていただきました。集合場所にはたくさん人が集まっていました。佐藤さんが私達家族のところに挨拶に来てくれました。

「さ、さ、さ、さ、さ、佐藤です。小学1年生のお、お、男の子、ふ、ふ、ふ、二人もう、来ています。」

目が点でした、

とても衝撃的でした。

あちらこちらで聞こえて来る、吃っている方達の

会話。中には本当に吃音があるのか分からない方もいましたが…。

ここにいたら、(息子は)「もっと酷くなるかもしれないから早く帰らないと」と、主人にこっそり伝えるも、「今更無理でしょう」と言う主人。

未知の世界への突入です。電車の中ではどうなるのだろうと顔は笑っていても不安を隠せない緊張をした私がいきました。

民宿に到着した後も私の緊張は消えません。息子の周りは食べる人達で、普通に会話をしています。その中で息子はどう思っているのだろうと考えている母親の私。それを他所に当時小1であった息子は楽しそうに大はしゃぎでした。

昼食時、茨城県から来たという武道をしている小学校高学年の男の子のお母さんと話をしました。私はその男の子の吃音は気にならなかったので、「本当に吃音がありますか？」

「家では本当に食べるよ、」

というお母さん。いろいろな形があるのだなと思いました。時間が経つに連れ、少しずつ場に慣れていったと思います。

小学生の参加は家族で参加という方が多く、同じ悩みを持つ家族の方にいろいろな話が聞けました。吃音の子を持つお母さん方とたくさん話をする場ができたのはとても安心に変わっていきました。

花火をしたり、地引網を引っ張ったり、吃音のこと以外にも楽しいイベントがありました。

今思い返し、佐藤さんの話を聞いて、覚えていることは、「自分が吃ることを周りにカミングアウトして、楽に過ごせる人もいる。」ということ、ここは、私達家族のポイントになりました。保護者会や人に聞かれたら普通に吃ることを伝える。私と息子はこれを今でも実践しています。

参加者全員が最後に一言を一人ずつ皆の前で話すという場がありました。それは、本当に吃音があるの?!という方もいれば、とても苦しそうに最初のことばを何度も言いながら話す、そして周りには最後まで聞く。

サマーキャンプに参加をして、親として良かったことは、**吃音で悩むのは我が家だけではなく、同じ悩みを持つ方々と話すことができたこと。**

吃音をなおす、なおしたい、と思う気持ちから、吃音と付き合っていく、という考えに変わり始めていったこと。

ただ、食べる人本人はどのように吃音と付き合っていくか。これは親は心配するだけで、苦しいつらい気持ちは本人しか分からない。それは幼い頃から今も変わっていません。

夏休み明け、ことばの教室の児嶋先生から、「お母さん、サマーキャンプの感想を教えて！」

私は、「こんなことを言ったらいけないのかもしれませんが、最初は衝撃的でした。このまま参加したら息子が更に吃音が悪化するから、集合場所の東京駅で自宅に帰ろうと思いました。最初は本当に心配でした。」

児嶋先生は、「アハハハハ〜」と、大笑いをしていました。

「お母さん、そんなふうに思ったんだ。吃音もそれぞれ違うから、そこに行ったからって酷くなることはないから大丈夫よ、でもそう思ったんだ、」

先生はまた、「アハハハハ〜」と、更に大笑いをしていました。

息子が小学生だった頃から知っている児嶋先生は一昨年三月にお亡くなりになりました。息子はもちろん、私にとって児嶋先生との出逢いはとても大きなものでした。吃音のこと以外にも児嶋先生に救われたことがたくさんありました。

児嶋先生が私に、「お母さんは思い立ったらすぐ行動に移すところ、ダメなら次を考えると、すごく良いと思う、それができない人もいますのよ。」と、嬉しいことばをいただいたことがありました。

当時、人は人に救われる、人との出会いだ！と行動に移して安心している私でしたが、一番悩んでいるのは本人です。考えなければいけないことはとにかく息子のことです。大人になった今では吃音のこと以外に心配することが他にたくさんありますが、何かあれば一人で悩まずどこかに、誰か

に相談して欲しいと思います。人に話すことで楽になることもあると思います。

サマーキャンプから16年、吃音のつどいとの出逢いは良い経験でした。今では吃音以外のことでも相談に乗っていただける方がいることは、私達家族にとっても心強いです。

PS

児嶋和子先生には、会えるものならまた児嶋先生にお会いしたいぐらいです。一緒にいると私にはとても落ち着ける大きな方でした。

児嶋 隆史さん（和子さんのご長男）から

生前、母が携わっていた仕事の内容や関わっていた方々のご様子を伺うことができ、また皆様のお役に少しでも立てていたのかと思うと、とても嬉しく感じております。

母も自分自身のことを語っていただき嬉しくて『ワハハ』と大きな声で笑っていることでしょう。

病に苦しんでいた時も笑顔を忘れる事なく、そして亡くなる数ヶ月前に、もし病を克服できたらもう一度職場に戻りたいと強く申しおりました。そのように母が思えたのも、常々生徒さんやご父兄の方々から元気を頂き支えられてきたからだと思います。仕事を通じ、母は人生を全うできたのだと強く感じております。

皆様には心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



♥ 児嶋和子さんは、このつどい第1回目を一緒に立ち上げた仲間・戦友のようなものです。**全難言東京大会 2007 第12分科会(連携)、2003年南陽小学校5年生普通学級授業**を、一緒にやり遂げられたのも、児嶋さんいらしたからこそでしょう。当事者との太いパイプが、難言教育の中でも必須と感じられての、素晴らしい行動力でした。

💎 吃音は治るものではない。隠すことが上手になることは有っても。ゆっくり話そうなどの、永続的効果無きものは、ほどほどに。本人がまず気が進んでいないという事実を大切に。 **代表 佐藤 隆治**